

第 1 章 武士道 (BUSIDOU The Soul of Japan) (抜粋)

☆作者紹介

新渡戸稲造は、文久二年（一八六二年）、明治新政府が誕生する六年前、現在の岩手県盛岡市で生まれた。家系は南部藩士で、代々十和田湖周辺の開拓指導者として知られていた。十六歳で札幌農学校（現・北海道大学）に入学した。「少年よ、大志を抱け！」で有名なクラーク博士は、キリスト教にもとづく人格教育に重きをおき、熱情あふれる人格教育で、孫弟子にあたる新渡戸たちにまで、感化するほどの校風を築き上げていたのである。後に旧制第一高等学校の校長となり、生徒たちに「自由と自治」を付与し、大きな影響を与えた。



1. 武士道とはなにか

(1) 高き身分の者に伴う義務

武士道は、日本の象徴である桜花とおなじように、日本の国土に咲く固有の華である。それはわが国の歴史の標本室に保存されているような古めかしい道德ではない。いまなお力と美の対象として、私たちの心の中に生きている。たとえ具体的な形はとらなくとも、道德的な薫りをまわりに漂わせ、私たちをいまなお惹きつけ、強い影響下にあることを教えてくれる。

武士道を生み、そして育てた社会的状態が失われてからすでに久しいが、あの遙かな遠い星が、かつて存在し、いまでも地上に光を降りそそいでいるように、封建制の所産である武士道の光は、その母体である封建制度よりも長く生き延びて、この国の人の倫（みち）のありようを照らしつけているのだ。

パーク（英国の政治家）は、武士道のヨーロッパにおける原型である騎士道の、すでに顧みられることのない棺に、感動的な賛辞をあたえたが、いま私は彼の国の言葉をもって、この問題を考察することに、大いなる喜びを感じている。ジョージ ミラー博士（アイルランドの歴史家）のような博学な学者ですら、極東における悲しむべき情報の欠如から、東洋には古代にも近代にも騎士道やそれに類する制度はいっさい存在したことがないなどと断言したが、このような無知は許されるべきであろう。なぜなら、博士の著作の第三版が出たのは、ベリー提督がわが国の鎖国の門を開いたのと同じ年だったからである。

それから十年以上たって、わが国の封建制が末期の苦しみにあえいでいた頃、カール マルクスは『資本論』を書き、封建制の社会的政治的諸制度を研究することの特殊な利点を指摘していた。そして当時、封建制の活きた形は日本においてのみ見られると述べて、読者の注意を呼び起こした。私も同じように、西洋の歴史および倫理研究者に、現代日本における武士道の研究にもつと力を注ぐよう勧めたいものである。

ヨーロッパと日本の封建制や騎士道と武士道の歴史的な比較研究は、大変魅力的なものであるが、それを詳述するのが本書の目的ではない。私の試みようとするものは、まず第一にわが国の武士道の起源と源流であり、第二にその特性や教訓、第三はそれらの民衆におよぼした影響、第四はその

影響と継続性、永続性について述べるところにある。

さて、私がおおざっぱに武士道(chivalry)と訳した言葉は、原語の日本語では騎士道よりも、もっと多くの意味合いを含んでいる。「ブシドウ」は字義的には「武士道」である。すなわち武士階級がその職業、および日常生活において守るべき道を意味する。一言でいえば「武士の掟」、すなわち、「高き身分の者に伴う義務」のことである。

(2) 勇猛果敢なフェア・プレーの精神

勇猛果敢なフェア・プレーの精神、この野性的で子供じみた素朴な感覚の中に、なんと豊かな道德の芽生えがあることか。これこそ、あらゆる文武の徳の根本といってよい。

私たちはイギリスの小説の主人公、トム ブラウンの「小さな子をけっしていじめず、大きな子から逃げなかった者、という名を後に残したい」という少年らしい願いに、微笑むであろう。

だが、この願いこそ道德律の萌芽であり、すべての道德の壮大な建造物が築かれる礎石といえるのである。もっとも穏やかで、もっとも平和を愛する宗教でさえ、この願望を認めているといえ、それは言い過ぎであろうか。このトムの願いの上にかの偉大な英国の大半が築かれたのである。そしてこれに優るとも劣らず、わが日本の武士道の土台もけっして小さくないことが、ほどなくわかるだろう。

クエーカー教徒がいうがごとく、戦闘というものは本来、攻撃的であるにせよ、防衛的であるにせよ、残忍で、間違った行為だったかも知れない。だが、「われわれは大いなる間違いの中からも、美德が湧き出ることを知っている」と、レッシング(ドイツの思想家)が述べることもまた、真実であることを知っている。「卑怯者」と「臆病者」という言葉は、健全でかつ純粋な性質の人間にとっては、もっとも侮辱的なレッテルであった。少年はこのような観念とともに歩み始めるのである。

武士も同様である。年を重ねるに従い生活範囲が広がり、人間関係が多方面にわたってくると、当初の信念はそれ自身を正当化し、満足させ、発展させるために、より高き権威や合理的な支持を求めるようになる。もし、武士が殺し合いの軍事的なものだけに頼り、より高き道德的な拘束力なしに生きたとするならば、武士の生活の中に武士道なる崇高な道德律は生まれなかったであろう。

ヨーロッパではキリスト教が騎士道に都合よく拡大解釈されたが、それでもなおキリスト教は騎士道に精神的な徳目を吹き込んでいたように思える。それはラマルティエヌ(フランスの詩人)が「宗教、戦争、そして榮譽は、完全なるキリスト教徒の騎士の三つの魂であった」と述べているように、である。同様に日本の武士道にもいくつかの源泉があったというべきであろう。

(3) 孔子を源泉とする武士道の道德律

武士道は、道德的な教義に関しては、孔子の教えがもっとも豊かな源泉となった。君臣、親子、夫婦、長幼、朋友についての「五倫」は、儒教の書物が中国からもたらされる以前から、日本人の民族的本能が認めていたものであって、それを確認したにすぎなかった。冷静で穏和な、しかも世故(せこ: 社会の風俗やならわし)に長けた孔子の政治道德の教えは、支配階級のサムライにとってとりわけふさわしいものであった。孔子の貴族的で保守的な教訓は、武士階級の要求に著しく適合したのだった。

加えて孔子について孟子の教えは、さらに武士道に大いなる権威をもたらし、孟子の強烈で、ときには極めて民主的な理論は、気概や思いやりのある性質の人にはとくに好かれた。だがその理

論は一面、封建的な秩序社会を覆す危険思想とも受け取られ、彼の書物は長い間禁書とされた。にもかかわらず、この優れた思想家の言葉は、サムライの心の中に不変の位置を占めていったのである。

孔子と孟子の著作は、若者にとっては主要な人生の教科書となり、大人の間では議論のときの最高の権成となった。だが、単にこの二人の古典を知っているだけでは、高い尊敬を受けることはできなかった。孔子を知識として知っているだけでは「論語読みの論語知らず」との諺が生まれたように、それは冷笑の対象とされ、西郷隆盛などは「書物の虫」として蔑んでいる。

あるいはまた三浦梅園などは、学問を青臭い野菜にたとえ、「青果はその青臭さを取り除くために何度も茹でなければならない。少ししか読書をしない者は少し学者くさく、大いに読書している者はさらに学者くさく、どちらも同じように困りものである」といった。梅園がいおうとした真意は、知識というものは、これを学ぶ者が心に同化させ、その人の品性に表れて初めて真の知識となる、ということである。だから知的専門家は単なる機械だとみられた。要するに知性は行動として表れる道徳的行為に従属するものと考えられたのである。

儒教では人間と宇宙はひとしく精神的かつ道徳的なものであるとされた。武士道は知識を重んじるものではない。重んずるものは行動である。したがって知識はそれ自体が目的とはならず、あくまで智慧を得るための手段でなければならなかった。単に知識だけをもつ者は、求めに応じて詩歌や格言をつくり出す“便利な機械”としか見られなかったのだ。

2. “礼・仁・義”を型として表す

(1) 最高の形態は「愛」である

日本人の美しき礼儀の良さは、外国人旅行者の誰もが認めるところである。だが、もし礼が、「品性（ひんせい）の良さ」を損なう恐れがあるがために行われるのであれば、それは貧弱な徳といわねばならない。なぜなら、礼は他を思いやる心が外へ表れたものでなければならないからだ。

それはまた、物事の道理を正当に尊重することであり、それゆえに社会的な地位を当然のこととして尊重する意味も含まれている。しかも、それは金銭上の貧富の差を問うのではなく、いかに人間として立派かを問うのであり、心の価値にもとづく区別なのである。

礼の最高の形態は、ほとんど愛に近づく。それは私たちにとって敬虔な気持ちをもって、「礼は寛容にして慈悲深く、人を憎まず、自慢せず、高ぶらず、相手を不愉快にさせないばかりか、自己の利益を求めず、憤らず、恨みを抱かない」ものであるといえる。ディーン教授（アメリカの動物学者）は人間としての六つの要素を掲げ、その中でも礼に人間関係の最高の地位をあたえているが、これはむしろ当然といえるだろう。

私はこのように礼を高く評価するが、かといって数ある徳目の中で最高位に置いているわけではない。礼を分析してみると、礼はさらなる高位の徳と関係していることがわかるからだ。もともと徳というものは孤立して存在しているわけではない。とくに礼は武人特有のものと賞賛され、本来の価値以上に尊重されているが、それゆえに偽物が生じているようにも思われる。孔子自身も、うわべだけの作法が礼儀ではないことは、音が音楽と同一ではないのと同じことだと繰り返して説いている。心がこもっていなければ礼とは呼べないのである。

礼儀作法が社交の必須条件にまで高められると、青少年たちに正しい社会的な振る舞い方を教え込むために、詳細な作法の体系がもてはやされるようになることは、当然のこととして予想された。

人に挨拶をする際のお辞儀の仕方、歩き方、座り方など、こと細かな注意が教えられ、学ばされた。食事の作法は学問にまでなった。茶を点てて飲むことは、礼式にまで高められた。教養ある人はこれらの作法のすべてに通していることが期待されたのである。

わが国のきめ細かな礼儀作法について、私はヨーロッパ人たちが軽蔑的な批評をしているのを聞いたことがある。彼らの批判は、そのような躰が私たちの柔軟な思考力を奪い、あまりにも厳格な礼儀作法は馬鹿げて見える、というのだ。たしかに、わが国の礼儀作法の中には不必要なほどのくどさがあることを私も認めている。だが、西洋人のたえず変化する流行へのこだわりほど、馬鹿げているかどうか、私にはわからない。

ただ私は、流行でさえ、単なる虚栄心の気まぐれとは考えていない。逆にこれらを、人間の飽くなき美への探求心とみている。まして念入りの礼儀作法をまったく取るに足らないものとは思っていない。なぜならそれは、ある成果を達成するために、もっとも適切な方法を長い年月をかけて試行してきた結果であるからだ。何ごとであれ、もし何かをしようとすれば、それを為すための最善の方法というものはあるはずである。そしてその最善の方法とは、もっとも無駄がなく、もっとも優美なやり方になるであろう。

それは初心者には退屈にすら思える。けれどもやがて、そうした定められた作法が、結局はもっとも時間や労力の節約になっていることに気づく。要するに、それがもっとも無駄のないやり方であり、スペンサーのいうところの「優美な方法」であることを発見するのだ。

社交的な礼儀作法の精神的意義とは何なのか。カーライル（英国の思想家）の『衣服哲学』の用語を借りれば、作法や儀礼は精神的規律の単なる上着ということになるのだが、その意味は外見だけでは計りがたい大きなものが潜んでいるといえる。スペンサーの例に倣って、わが国の儀式制度や礼儀作法の起源、あるいはそれらを生みだした道徳的な動機をたどることもできようが、それは私が本書で取りあげるべきものではない。私がここで強調したいのは、礼を厳密に守ることにもなう道徳的訓練についてである。

作法は細部にわたって念入りに定められているため、それぞれが別の様式を唱えて、いろいろな流派が誕生した。だがそれらは根本的なところではすべて一致している。もっとも有名な礼法の流派である小笠原宗家（小笠原清務）の言葉によれば、「礼道の要諦は心を陶冶することにある。礼をもつて端座すれば、凶人剣を取って向かうとも害を加うること能わず」という。つまり、正しい作法をたえず訓練することによって、身体のあらゆる器官と機能に完全な秩序をもたらし、肉体と環境とを調和させることによって精神の支配をおこなうことができる、というのである。優美さが無駄を省いた作法という言葉が真実なら、優美な立ち居振る舞いのあくなき練習は、論理的に言えば、内なる余力を蓄えることにつながる。したがって洗練された作法というものは、平静状態の無限なる力を意味する。では、作法を通じて本当に高い精神約境地に達することができるのか。いや、なぜできないことがあろうか。

3. 武士道の残影

（1）「小柄なジャップ」の持つ忍耐力、不屈の精神

武士道の影響力は、現実社会においても誰にでも見て取れるほど明白である。日本人の生活を一瞥すれば、そのことはすぐにわかる。日本人の心をもっとも雄弁かつ誠実に紹介したラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の作品を読めば、彼が描くところの日本人の心情が、まぎれもなく武士道の一

例であることがわかる。国民がみな一様に礼儀正しいことは武士道の賜物である。このことはよく知られているので、改めて繰り返す必要もないほどだ。「小柄なジャップ」のもつ忍耐力、不屈の精神、そして勇氣は日清戦争によって十分に証明されたではないか。

「日本人以上に忠実で愛国的な国民がほかにいるだろうか」とは、このとき世界の多くの人々が發した問いであるが、私は誇りをもって「否」と答えることができる。その意味でも私たちは武士道に感謝しなければならない。しかしながら、その反面、私たち日本人の欠点や短所もまた、大いに武士道に責任があることも認めなければ、公平さを欠くであろう。たとえば、すでにわが国の若い人の中には、科学分野では国際的な名声を得ている人がいるというのに、深遠な哲学の分野では誰もまだ偉業を達成した人はいない。この原因は武士道の訓育にあっては形而上学的な思考訓練がおろそかにされていたからである。また、日本人の過度に感じやすく、激しやすい性質についても、私たちの名誉心にその責任がある。そして外国人からよく指摘されるような「日本人は尊大な自負心を持っている」という言葉も、これもまた名誉心の病的な行き過ぎによる結果であるといえる。

（2）バンカラの起源

日本を旅行していると、ぼさぼさ頭に粗末な身なりで、手に大きな杖か本を抱え、世俗的な事柄にはまったく無関心といった風情で、通りを闊歩する数人の若者を見かけることがあるだろう。彼は「書生」（学生）であり、彼にとって地球はあまりにも狭すぎ、天空とてけっして高くない。彼は独自の世界観や人生観をもち、心は空中の樓閣に住み、幽玄な知識の言葉を食べて生きている。その目には大志の炎が燃え、その心は知識を渴望している。赤貧は彼をいっそう磨き上げる刺激となり、彼の目から見ると、世俗的な財産は、彼の人格にとって足枷に映る。彼は忠義心と愛国心の権化であり、みずからを国家の榮譽の番人であることを自負している。彼の美点も欠点も、つまりは武士道の最後の残滓なのである。（**バンカラの起源**）

第2章 応援団の原点

(1) 応援団の起源

試合に応援はつきものである。

親戚など知人の試合があれば、関係者は応援にでかける。

明治維新となって、旧制高等学校ができたのが、明治20年である。この当時は一高から八高までのいわゆるナンバースクールが、学校としての応援活動の始めと考えている。

当時の高校生は、武士のこどもたちがほとんどであった。しかも全寮生が一般であった。試合があると、寮生が応援に繰り出した。これが応援団である。相手校にも応援団がついて来ており、団長が挑戦状を読み上げた。試合が始まると、ある者（リーダーは、当時からそう呼ばれていた）の合図によって声を出して踊った。踊るのはストームである。ただただ寮歌を歌いながら踊り続けるのである。

少し時代が過ぎると、ストームだけではもの足りなくなって、演舞が始まったのではなかろうか。どういう訳かは知らないが、「三三七拍子」は誰でも知っていた。これに振りを付けたのが演舞の始まりではないかと想像している。

九大初代団長は、実に古風な「三三七拍子」をやる。たぶん自分が現役のときに始めたものだろうと想像する。彼は宴席で所望されると、すぐにこれを披露する。卒業以来60年も続けていると睨んでいる。

(2) 九大応援団の起源

『応援団と私』団誌雄渾創刊号より

初代団長 川崎賢祥



応援団、それは私の大学生活の大半を傾けた団体である。応援団は私の試練の場であり憩いの場であった。従って私の大学生活の苦しい又は楽しい思い出の殆んどが——もちろん今では全てが懐かしい楽しい思い出だが——応援団に於けるものであった。

私の生活のリズムは応援団を中心としたものであり、応援団活動を通しての自信・信念は勉強やアルバイトの大きな支えともなった。応援団創設については当時、賛否両論があり、多くの困難もあり、何度か創設を断念しようかと思ったものだが、残り少ない大学生活を前に今思うことは、「応援団を創って本当によかった。」という事である。残りわずかの学生生活も足かけ四年間に渡って鍛えた応援団魂で余裕をもって送れそうである。更にこの応援団魂は、今後私の生涯を通じて私の支

えとなり、又ここで得た体験はあらゆる困難を突き破ってくれると信じている。

現在、三年の歴史を持ち、西日本国立大学応援団の草分けとして、名実共に、堅実な歩みを続けている九大応援団の姿を見る時、感慨胸に迫るものがある。

さる五月に初代幹部が引退し、団長も二代目となり新幹部を中心としてのめざましい活躍は嬉しい限りだが、取り残されていくような寂しさを感じるのは私一人ではあるまい。

応援団は私達の巣であった。そこには心の通じる同志がいた。定まった部室も無かったが、我々の集まる所はどこでも巣になりえた。そして最近部室を得て、我々の巣はようやく落着いた。この巣を中心に仲間も溢れる程に増えた。

今応援団は新しい時代を迎えようとしている。私は情熱にたぎる後輩達に応援団の進んで きた道の記憶を辿りながら綴ってみよう。そして出来れば私達の意志を受け継いで欲しいし、九大応援団独自のすばらしい伝統を築いて欲しいものだ。

昭和三十八年十二月、当時一年生だった私は元副団長の溝上参謀と共に「九大の沈滞ムードと連帯意識の欠如した学生の風潮を打破し、九大の意気を天下に示す応援団を創ろう。そして九大の旗の下に、全学生が参集し、力強く世界の九大をめざして前進しよう。」と誓いあった。

これは腹案のまま年を越し、翌三十九年二月結団ガイダンスを行った。そして三月の第一回合宿に参加したのは全員で五名だった。

とにかくやろうというので、各々わずかの金を出し合って笛と白手袋を購入し見真似、手真似で、即興の演舞を作り、その月の卒業生歓送会に出演した。今考えると実に単純で稚拙な演舞であったが出席者観覧席からの拍手激励に一同感激したものであった。このメンバーの中で今も残っているのは共に元副団長を勤めた溝上水辺の両参謀であるのは寂しい。

四月の新入生獲得も失敗し退団者も続きその 夏の京都の国立七大戦、宮崎の九州インカレに参加したのは、結局七名であった。しかし勢い は天を突くばかりで紫紺の大応援団旗と四十牛口の大応援太鼓をひっさげて九州男児の意気を示したものである。この応援団旗と応援太鼓について は当時学生部の垂水次長、渋谷課長、中川掛長、渡辺掛長等の御理解と御尽力の賜物であり、感謝の念にたえない。一方、応援の方法やルール等一向に知らない新米応援団は到る所で失敗を重ねた。

当時二年生で初代団長の任にあった私は対外的交際・交渉に気を使い他大学の四年生団長の貫禄に負けまいと必要以上に虚勢を張ったりしたものだ。従ってかなり専断的専横的行為をやって応援団内部は激しい対立の場となる事もあった。

わずか七名の団員が二つにも三つにも分れて応援団の在り方進路について、しばらく激しい口論を交したものであった。まとめ役であるべき私自身が激論の一方の将として我を張ったのだから全く恥ずかしい次第で穴があればはいりたい思いである。

しかし真に応援団を愛していた故の口論であり、これらの意見の相違で団を去る者は誰もいなかった。口論し譲歩し妥協していく中で我々は強い絆で結ばれていったし応援団も軌道に乗り始めた。年を越え四十年三月の卒業生歓送会、四月の新入生歓迎会に二度目の出演で、著しい進歩に参観者を驚かせていた。

この時すでに応援団顧問に法学部の高田源清教授の絶大な後援の下、応援団専属ブラスバンド部創設という大仕事に着手していた。福岡では学長始め九大関係者、九大卒業の大先輩の協力を頼んだ。又、当時マネージャーの水辺参謀と私は上京し東京の先輩の協力を求めた。

更にすでに九大祭前夜祭の準備は並行して進んでいた。応援団は前夜祭と市中パレードの責任担

当を引き受け、十数名の団員は大変な多忙を極めた。私は更に個人的所用も重なって遂にアルバイト先で倒れてしまった。又、当時訓練部長の枝元参謀も発熱し大変だったが、私達の若さと情熱と根性はそれらに屈せず、九大祭は成功裡に終った。

この二重三重の仕事を見事切り抜けたのは、応援団全員の団結の強さ以外の何物でもなかった。私はこの時応援団の将来に絶対的の希望が持てた。暴力や強制等なくても相互の信頼と団結はすばらしい力を発揮出来る事を知った。この自信は応援団長としての私の鼻息をかなり荒くしていたようであった。そして七月先輩各位の協力の御蔭で専属ブラバンが三十万円を投じて結成され、藤丸参謀が初代ブラバン部長となった。しかしその夏の北九州と大阪の遠征には使えず、ブラバンの活動は陽の目をみなかった。しかし気鋭の十五名の団員は正に九州男児の本領を発揮し、新ユニホームの九大応援団は旧七帝大応援団の中で異彩を放ち、堂々とその成長を誇示し、他大学の驚嘆を誘った事は特筆に値するこの遠征後、九大応援団は大学応援団として完全に形態を備えるに到った。

合宿練習の繰り返しの中で団員も増し翌四十一年三月、九大応援団はリーダー部ブラバン部の二部制の応援団として卒業生歓送会に出演した。実に創立後満二周年にしてようやく、応援団は押しも押されもしない九大の柱として両足で大地に仁王立ちする団体となった。私はリーダーとして舞台で力の限りに腕を振っている時、筆舌に尽くし難い幸福感・満足感に包まれたのであった。演舞の後感激に涙のにじむ思いであった。

この時私は創立以来続けてきた、団長の位置を引く時が来た事を改めて知ったエネルギーが必要だった。引退を決意した時、寂しい気持と共にホッとした気持があったのは事実である。

私は一年生の終りから四年生の初めまで文学部の一学生川崎賢祥であるより、応援団長の川崎賢祥であった感が強い。そしてしばしば一学生個人でありたいと思った。

応援団長の肩書きは常に私についてまわり、私の生活を規制し縛りつけたように思えた。そしてこの五月に役員交代して以来、名目は参謀であるが現役でない私は、自由で身軽な文学部の一学生にすぎない。もう今の九大応援団に私は必要でないし、私のはいり込む所も無くなっていくようだ。そう思うと無性にさびしい。

しかし、今、以前の私達と同じような否それ以上の情熱をもった若者達が私達の後に続いて、私達の代りに頑張ってくれている。今や後に憂いなしである。ここに到ったには、これまで止むを得ぬ種々の事情で退団していった、多くの仲間達の残した功績も忘れられない。

私は機会ある事に述べ続けてきた事だが、この大学時代を損得抜きで応援団に賭ける純粋な若者のいる限り、大学は滅びないと信ずる。

世界の九大を目指して応援団と共に卒業生、在学生関係各位が一丸となって前進していこう、そこに素晴らしい未来がある。

九大万才！

応援団万才！

日本万才！

(文学部西洋史学科 四年 川崎 賢祥 けんぞう)